

「気」の探求による創造活動に関する研究と実践

—参道空間における「身体知」としての「気」の記譜を契機に—

李 光宗 1321918

要旨

本研究は、創造活動において「気」を探求するにあたり、筆者が参道空間において「気」の記譜を試みる過程で、「気」の捉え方の変遷とともに自身の創作方式を生み出すことを目指した実践的研究である。

- ・本研究の狙い：「気」の新たな解釈を得る。自己の「気」があらわれる作品を創作する。
- ・本研究の問い：創造活動において「気」をどのように捉えるべきか。
- ・本研究の主張：「気」は身体的なものであり、「身体知」として捉えるべきである。

創作過程において、「気」という自己の身体の変容を意識するべきである。

古くから語られてきた「気」、一体どのようなものなのか、特に、創作活動において「気」をどのように捉えるべきかという興味が発端である。筆者は、「気を感じる風景」をテーマにした自身の修了制作《気-混沌の余韻》に対して省察した結果、概念としての「気」を理解して表現するというより、実在の空間に焦点を当てながら探求するべきだと気づいた。

その気づきの変遷によって、筆者は、「気」の空間づくりに着目し、多種多様な参道空間において実地体感を行い、歩行移動で感じとった「気」を記譜することにした。それは、独自の記譜法「グラデーション・マッピング」を構築し、自己体感を可視化、および言説化する実践である。

しかし、その実践結果を検証する中、筆者が記譜した「気」と現実的環境情報に齟齬が生じた。環境からの直接的刺激なのか、想像や自分なりの解釈なのか、つまり体と心の「ずれ」を実感した。さらに哲学者・心理学者の湯浅泰雄の観点（「気」とは、心と身体を一つに結びつけている生命体に特有なエネルギーである）を踏まえて、筆者は、「気」は外的・空間的なものばかりではなく、自己の身体的なものであると思考変遷してきた。

そういった、自作省察および既存研究を契機に、「気」は身体的なものであれば、改めて自己の身体に焦点を当てながら記譜法を厳密化するべきだと気づいた。それによって、環境や他者の存在、および自身の体といった「外界」、自己の情動・思想（言葉）・記憶などの「内界」、そしてその「境界」は身体であり、「気」をその身体の変容として捉えるべきであると主張している。

さらに、記譜法の厳密化を経て、実践結果では全体的な身体像となりつつ、個別具体的な場所に対して自分なりに意味付け、区別し、自己の身体において微妙な変容を表現しようとしている。そして筆者は、実は「気」を自己の「身体知」として捉えていると気づいた。

認知科学の研究者の諏訪正樹が提唱している「からだメタ認知」によると、自己体感を留意し、表現して言説化するという、筆者が行っている「気」の記譜は、まさに身体知の学びである。したがって、その「気」の記譜という学びを主体的・積極的に行うことによって、自己における「新たな内界」が形成され

つつ、それを意識して何らかの「外界」を創作すれば、「身体知」としての「気」があらわれる作品として成り立つと考え、創作実践に至った。

本研究の目的は、「気」とは何かについて、参道空間における「気」の記譜といった、自己の身体に焦点を当てて実践しながら、個人固有な解釈を得ることと、自己の「気」があらわれる作品を創作することである。

参道空間における「気」の記譜は、筆者の創作行為と直接的関係を持たないが、身体知の学びを促すため、自己の「内界」と対話する一種の稽古として捉えられる。それは、参道という人の感性に訴える空間で出会ったものごとを、思考対象にするために可視化・言説化し、繰り返した上、自己の身体が何を、どのように捉えて感動しているという、内省することである。そしてその内省を活かして創作する。

具体的にいうと、複数の木材を作品部材として用いて、完成像のないまま制作過程のひとつひとつの場面において、さまざまな可能性を考慮し、部分から全体への架構制作を行うことである。意識的かつ無意識的に、計画的かつ即興的に、自己の心身の「ずれ」を認識し、苦慮しながら「全体像」を生み出していくからこそ、筆者が自身の意志や趣向を確認することができ、筆者の「身体知」としての「気」が作品に宿ると考える。

本論文は、第1章では、「気」とは何かについて、これまで「気」を言及してきた文献学者や漢文学者、哲学者からその字義や語義、概念を整理した。それらを踏まえて、「気」を身体的なものとして捉えるべきと論じた。

第2章では、「気」を理解するには、概念上ばかりでなく、自己の身体を通して感じとったもの、つまり体感から理解する必要があると主張する。参道空間における「気」の記譜といった実践を行った。そのため、参道空間に焦点を当てる理由を述べ、記譜に関する先行研究を踏まえて、記譜法「グラデーション・マッピング」を構築した。自己の身体を用いて実践して考察を経て、参道という人の感性に訴える空間を感じ歩く中、心と体の働きが相まって変容が生まれ、その身体の変容は「気」である、と解釈している。

第3章では、記譜実践を行う主体は他者ではなく、筆者自身であり、つまり自己の「気」——身体の変容を深く探求すれば、記譜法「グラデーション・マッピング」をより厳密にする必要があると主張する。記譜法を修正した上、修正前後の記譜実例を対照的に考察した。結果、筆者は、実は自己の「身体知」として「気」を捉えていることに気づいた。したがって、参道空間における「気」の記譜は、身体知の学びであり、創造活動のメソッドとして取り上げた。

第4章では、筆者は、そういったメソッドに基づき、作品を制作しながら、自作に対する考察・省察を行った。それらによって、創作における「こと」と「わざ」を掌握し、自己の「身体知」としての「気」があらわれる作品の創作方法を確立した。

第5章では、博士審査展 2025 出品作品《気-形而上下》を制作し、展示して鑑賞者との交流を経て、新たな考察を行う。

第6章では、全体の考察を行い、本研究の意義と価値を論じた。

第7章では、本研究を振り返り、筆者のデザイナーと美術作家として今後の展開を述べた。